

国土社版 世界の名作

ビーチヤといたずら友だち

ニコライ・ニコライビッチ・ノーソフ＝原作

昇 隆一＝訳



国土社版 世界の名作 25

ビーチャといたずら友だち



ニコライ・ニコラーエビッチ・ノーソフ

ビーチャといたずら友だち 昇 隆一訳

国土社 1977

293p 22cm (国土社版 世界の名作25)

基本カード記載例

国土社版 世界の名作25

ビーチャといたずら^{とも}友だち

昭和52年11月10日 初版印刷

昭和52年11月20日 初版発行

著 者 ニコライ・ニコラーエビッチ・ノーソフ

訳 者 ^{のぼり りゅういち} 昇 隆一

発行者 長宗泰造

発行所 株式会社国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

電話 東京 (03) 943-3721(代)

振替 東京 6-90631

印刷所 株式会社厚徳社

落丁・乱丁の本はおとりかえします

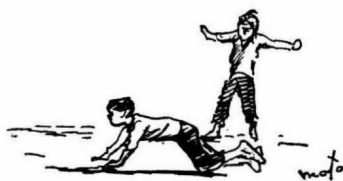
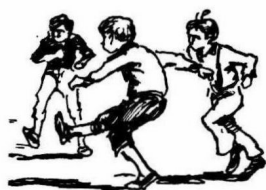
©検印廃止

ビーチャといたずら^{とも}友だち

ニコライ・ニコラエビッチ・ノースフ作

昇隆一訳

ピーチャといたずら友だち・もくじ



12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
サーカスのまねをするコスチャ	サーカス見物	コスチャのいたずら	ビーチャの勉強法	二度めの落第点	演芸大会	ビーチャの大奮闘	よく勉強しよう	落第点	ちびっ子マドロスのまんが	ビーチャのにがてな宿題	新学期のはじまり
	159	146	130	119	102	88	80	63			7
									43	26	



	21	20	19	18	17	16	15	14	13
解説	学校一のクラス	図書係になったコスチャ	新年祭	犬の訓練に成功	コスチャを助けよう	校長先生に呼び出される	万事休す	コスチャのずる休み	犬に計算を仕込む
290	281		255	246	233		209		180
		267				225		197	

Ⅰ 新学期のはじまり

時間がたつので、なんてはやいんだろう！

自分がなにをしたか思い出してみようとしたときには、もう夏休みは終わって、学校へ行く日になってしまった。ぼくが夏じゅうにやったことといえば、ただなんとなくおもてをかけたわったり、フットボールをしたことくらいで、本のことなんか、考えるのも忘れてしまったくらいだ。たまに読んだのはたしかだが、それも教科書ではなく、おとし話とか、物語のような本ばかりで、国語とか算数の勉強はちっともしなかった。

ぼくは、国語はいつもよく勉強していたのだけれど、算数はきらいだ。それに、いちばんにがては宿題だ。オリガ先生はぼくに、夏休みの算数の宿題を出そうとしたのだが、あとになったら、ぼくがかわいそうになったのか、宿題も出さずに、そのまま第四学年に進級させてくれた。

「わたしはピーチャ君に、夏休みを楽しくすごさせてあげたいの。だから、このまま進級させるわ。そのかわり、夏休みのあいだに自分で算数の勉強をするって約束してちょうだい。」と、オリガ先生はいった。

もちろん、ぼくは約束した。だが、学校の授業が終わったとたんに、算数のことなんか全部忘れてしまった。もし新学期のはじまる日がやってこなかったら、ぼくはきっと、算数のことなんか永久に思い出さなかったろう。ぼくは約束をまもらなかったことが恥ずかしかったが、いまとってはどうしようもない。

そういうわけで、夏休みはあつというまにすぎてしまった！ ある晴れた日の朝——それは九月一日だったが——ぼくはいつもよりはやめに起きて、自分の教科書をかばんに入れて、学校へ出かけた。この日、町の通りは、とても活気に満ちていた。男の子も女の子も、大きな子も小さな子も、みんな号令でもかけられたように、どっと通りへ群がって出てくると、元氣よく学校へ歩いて行った。

一人で歩いて行く者もいれば、二人づれの者もいたが、五、六人ずつ組になって歩いている者もあった。また、なかには、ぼくのようにいそがず、のんびり歩いていた者もいたが、まるで火事場へでも行くように、いちもくさんに走って行く者もいた。低学年の生徒たちは、教室をかざるために花をかかえていた。女の子たちはキャアキャアさわいでいたが、男の子のなかにも、ワイワイさけんだり、大声で笑ったりしている者もいた。

ぼくも楽しかった。ぼくは、もうすぐまた、自分のピオネール（少年団）部隊や、同級生の隊員たちや、去年ぼくたちをきたえてくれた指導者のワロージャさんに会えると思うと、うれしく

てたまらなかった。ぼくはなんだか、自分が旅行者のように思われた。ずっとまえに旅行に出かけて、ようやくいま、家へ帰ってくる途中——ほら、もうすぐ故郷の川岸や、身内や友だちのなつかしい顔を見ることができると思っている旅行者——のように。

でも、やっぱりぼくは、心から楽しいというわけではなかった。なぜなら、去年、ぼくと机をならべていた、ぼくのいちばんの親友フェージャに会えないことがわかっていたからだ。フェージャはつい最近、家じゅうみんなでこの町から引っ越していったので、いつかまた会えるかどうか、だれにもわからなかった。

それにもう一つ、ぼくにとってゆううつだったのは、オリガ先生に、夏休みに算数の勉強をしましたがときかれたら、なんと答えていいかわからないことだった。ああ、算数やろうめ！ おまえのおかげで、ぼくの気分はだいなしになってしまった。

空には、夏のようなあかるい太陽がきらきらとかがやいていたが、すずしい秋風が吹いて、木の枝から黄色い葉っぱが散っていた。木の葉は、空中でひらひらと舞いながら落ちてきた。風が歩道へ落ちた木の葉をどんどん運んでいった。木の葉も、どこかへいそいでいるように見える。

ぼくは、学校の入口の上に、赤い大きなプラカードが出ているのを遠くから見つけた。それには、「歓迎！」という大きな字が書いてあり、まわりがぐるりと花でかざられていた。ぼくは、これと同じプラカードが、この同じ場所に、同じ日に、去年も、おとしも、そして、ぼくがまだま

るでちいさいころ、はじめて学校へきた日にもかかっていたのを、思い出した。また、ぼくの頭には、すぎ去った年のことがみんなうかんできた。一年生のときのことや、はやく大きくなって、ピオネールになりたいなあと空想していたときのことなどが――。

こうしたことが、みんな思い出された。そして、なんだかうれしさが胸にこみあげてきて、まるでなにかとってもいいことが起こったような気持ちがした。ぼくの足はひとりでに早くなり、かけ足になるのをおさえるのがやっとだった。だが、こんなにうれしがるなんて、おかしいや。ぼくはもう一年生のちびっ子じゃなくて、四年生なんだよ！

校庭は、もう生徒でいっぱいだった。生徒たちはあちこちに何人かずつ、学年別にかたまっていた。ぼくはすばやく、自分の同級生を見つけた。みんなはぼくを見つけると、ワーツと声をあげてかけ集まり、ぼくの肩や背中をポンポンとたたいた。ぼくは、みんながぼくのきたことをこれほどよろこんでくれるとは思ってもみなかった。

「おい、フェーシャはどこだか知らないか？」と、グリーンシャがぼくにきいた。

「ほんとだ、フェーシャはどこだろう？」と、みんなはさけびだした。「おまえはいつも、フェーシャといっしょにかよっていたじゃないか。おまえ、どこでフェーシャとはぐれたんだい？」

「フェーシャはいないよ。あいつはもう、おれたちの学校にはこないんだ。」と、ぼくは答えた。

「なぜだい？」

「フェーじゃは家じゆうみんな、この町からよその町へ行ってしまったんだ。」

「どうして？」

「べつに、どうってことはないよ。」

「おまえ、うそをついてるんじゃないだろうな？」と、アrikがきいた。

「うそなんかつくもんか！」

みんなはぼくの顔をのぞきこんで、へんだなあというようににやにやしていた。

「おい、みんな、ワーニャもないぞ！」と、リョーニャがいった。

「セリョージャもないや！」と、みんながさげんだ。

「ひよっとすると、あいつたちもよその町へ行ってしまったて、知らないのはおれたちだけかも……。」と、トリーヤがいった。

ちょうどそのとき、学校の裏門うしろもんがあいて、ワーニャがこっちへ近づいてくるのが見えた。

「ばんざーい！」と、ぼくたちはさげんだ。

みんなはワーニャをむかえにかけだし、ワーッといってワーニャをつかまえた。

「はなしてくれよ！ 人間にんげんをはじめて見たわけじゃあるまいし。」と、ワーニャは、ぼくたちの手からのがれようとして、もがきながらいった。

だが、みんなは、ただワーニャの肩かたや背中せなかをたたきたかっただけなのだ。ぼくもそうしたかつ

たのだが、手がすべって、頭をなぐってしまった。

「はあ、わかったぞ。おまえたちは、おれとけんかをする気だなー」と、ワーニヤはかんかんにおこってしまい、力^{ちから}いっぱいぼくたちの手をふりきろうとした。

しかし、ぼくたちはますますびったりとワーニヤをとりかこんだ。

このままつづいたら、いったいどうなったかわからない。だが、ちょうどこのとき、セリョージャがやってきた。するとみんなはもうワーニヤをそっちのけにして、こんどはセリョージャをめがけて突進^{とっしん}して行った。

「これでどうやら、みんな集まったようだな。」と、ジェーニヤがいった。

「フェージャを数^{かず}にいれなけりゃあな。」と、イーゴリが答^{こた}えた。

「フェージャはよそへ行ってしまったのに、どうして数^{かず}にいれるんだ？」

「もしかすると、フェージャが引^ひつ越^こしたなんて、うそかもしれないぞ。そうだ、オリガ先生にきいてみよう。」

「おれのいったことを、信^{しん}じようと信じまいとかまわさないさ。だが、おれは、ほんとのことをいっただけなんだから！」と、ぼくはいった。

みんなは、おたがいの顔^{かほ}をじろじろとながめて、夏休^{なつやす}みをどうすごしたかを話しはじめた。あ
る者はピオネールのキャンプへ行き、ある者は両親^{りやうしん}といっしょに別荘^{べつそう}で暮^くらした。ぼくたちはみ

んな、夏のあいだにすっかり大きくなって、日にやけた。だが、だれよりもいちばん日にやけたのはグレーブだった。その顔は、まるでたき火の上でいぶされたように見える。ただブロンド色のまゆ毛だけが、顔のなかで光っていた。

「おまえ、どこでそんなにやけたんだい？　夏じゅう、ピオネールのキャンプにいたんじゃないか？」と、トーリヤがきいた。

「いいや、おれは、はじめのあいだピオネールのキャンプにいたんだけど、そのあとでクリミアへ行ったんだ。」

「いったい、どういうわけでクリミアなんかへ行けたんだい？」

「かんたんだよ。お父さんが工場で〈海の家〉へ行ける券をもらったのさ。それでお父さんは、お母さんとぼくもいっしょにつれて行くようにしたんだ。」

「それで、クリミアへ行ってきたってわけだな？」

「ああ、行ってきたよ。」

「それじゃあ、海を見たかい？」

「海も見たよ。なんでもかんでも、みんな見た。」

ぼくたちは、ぐるりとグレーブをとりまき、なにかめずらしいものでも見るように、じろじろながめまわした。

「さあ、海^{うみ}ってどんなものか話してくれよ。どうしてそんなにだまってるんだ？」と、セリョージャがいった。

「海^{うみ}っていうのは、大きなものだよ。」と、グレープは話した。「すごく大きくって、こっちの岸^{きし}に立っていると、むこう岸^{ぎし}が見えないくらいなんだ。こっちには岸があるんだけど、むこうには岸なんかないんだよ。水の多いこといったら！ひと口^{くち}にいうとね、ただ水だけがあるんだ！それに、太陽^{たいよう}がぎらぎら照^てりつけるもんだから、ぼくの皮^{かわ}がくるとひと皮^{かわ}むけちゃった。」

「うそをつけ！」

「ほんとだったら！このおれだって、最初^{さいしょ}はびっくりしたけど、あとになって、この皮^{かわ}の下にもう一つべつの皮^{かわ}があることがわかったんだ。つまり、いまおれは、その二番^{ばん}めの皮^{かわ}をつけているのさ。」

「皮^{かわ}のことなんかじゃなくて、海^{うみ}のことを話せよ！」

「いま話すよ……。海^{うみ}っていうのは、とっても大きいものだ！海のなかにはたくさん水がある！ひと口^{くち}にいうと、海^{うみ}じゅうが水なんだ。」

この調子^{ちようし}だと、グレープは海^{うみ}について、それからさきどんなことを話したかわからなかったが、ちょうどこのとき、指導者^{しどうしや}のワロージャさんがぼくたちのところへやってきた。たちまち、